

## 材料集め | 土 (1)

2009年4月~7月



9号線工事現場にて、  
2009/4/23

つちのいえは、つくる前提として、土を無償でどう入手するかが重要であった。それには、地域の土木工事の把握や、工事に関わる人々とのネットワークが鍵になる。高速道路工事に関連して、当時、大枝大原野地域では土木工事が多発していた。

9号線沿いの工事現場からは、達城土木さんに良質な粘土質の土を取らせていただき、学内までトラックで運んでいただいた。

版築に使う砂分の多い土は、芸大裏の造成地から許可を得て採らせていただいた。



\*大敷家の土塀が壊され、大量の土を得られるのは2010年5月になってからである。(p. )  
\*芸大のつちのいえの丘の下に粘土層が埋もれていることを知るのは数年後のことである。(p. )



砕いて版築用に用いた土塊

## 材料集め | 竹

地域で入手しやすい自然素材として竹がある。大枝・大原野のあちこちに竹林があり、放置されているところも多い。

竹は、竹木舞や柱・梁・屋根などの建材や、壁の装飾、器や食器など、無数に活用方法があるが、製材された材木を買うことをしないわれわれからすれば、竹の軽さと丈夫さは、空間をつくる手がかかりとして材木代わりに利用しやすいのが魅力だった。

竹は当初、京大桂キャンパスの竹林からいただいた。広大な竹林だが、当時はほとんど放置状態で、少人数のわれわれは、いくらでもどうぞと許可された。

その後は大原野の竹林の所有者の方と懇意になり、幾度も無償で取らせていただいた。

運搬にはレンタカーや自家用車を使った。

ただ、竹を切るのに適しているのは水分が少ない秋～冬であり、授業化して週1回木曜午後のみとなった作業の進行と合わない場合が多かった。

自然の生命のサイクルと近代的な教育システムのサイクルは必ずしも合致していない。自然素材を用いるつちのいえでは、このことをその後も何度か痛感させられた。



2009/5/21



京大桂キャンパスの竹林で。竹を切るのは小清水漸先生。上は芸大への運び込み風景。(2009/5/21)



2014/10/30

大原野の竹林で。竹を切るのは留学生のZarya。こうした風景は何度となく繰り返された。

## 敷地開拓

2009年4月

2008年度後期から、学外での「峠の茶屋制作」と並行して、学内で自然素材による建築を行うための敷地を探した。

音楽棟野外ステージの南側の丘は、長く手入れされておらず、ほとんどジャングル状態だった。だが、西門から尾根沿いに敷石を並べた遊歩道を見つげ、たどっていくと、丘の上に円形の基壇が埋もれていた。花壇づくりを放棄したようで、かつては丘を公園化する計画があったと推測する。

2009年春からこの土地の開拓に着手した。



所在不明の森の中のような場所で、生い茂る草を刈り、注意深く基壇を掘り起こす。半径350cmほどの円形基壇が姿を現わしたとき、この場所に建てるのが必然と思われた。





## 作業小屋をつくる

2009年6月

敷地開拓のあと、水準を出して整地しつつ、まず作業小屋を円形基壇の脇につくることにした。雨天時でも作業をスムーズに進め、また話しあいや道具類の収納のためである。生えている木を柱に利用して、梁の一つをかけた。ほかの柱2本は地域から集めた柱の古材を利用した。床には、学内で拾い集めたパレットを利用。厚みが100～140mmとバラバラで、基礎にはブロックを用い、段差を設けた。屋根は軒を1m突き出し、軒下も作業に利用できるようにした。(屋根に張るポリカーボネートはやむなく購入)。

同じくパレットを利用してテーブルをつくり、話し合いやデスクワークに用いた。





## 粘土模型による検討

2009年5～6月

工事現場から入手した粘土を用いて、どのような家をつくるか、参加者各自で模型をつくって検討する。

円形基壇に沿った円筒型案を採用する。



2009年6月18日

## つちのいえ初期を振り返って

栗本夏樹

漆造形作家  
京都芸大漆工専攻教授

私がテーマ演習『つちのいえ』に参加させて頂いたのは2009年の前期と後期の事でした。今から10年以上前の事で記憶が曖昧でしたが、つちのいえのブログのお陰で少し記憶が蘇ってきました。元々、漆工専攻の学生が参加していた『峠の茶屋』を見学に行ったのが最初の出会いでした。丸太を削り出したプリミティブなハシゴを登って峠の茶屋の2階に上がると解放的で清々しい風を感じることが出来ました。

その次の年(2009年)から大学校内で峠の茶屋の経験を生かした家を建てる計画

が始まり参加させて頂く事にしました。まず、家を立てる場所を選定して、その近く集まって木切れや粘土で模型を作りながら家の構想を練りました。家の中心に木の幹を版築で固め真柱としました。真柱を軸に傘状に竹で家の骨組みを作っていました。最初は全体を支える強度がでず何度もやり直した事を覚えています。学生と教員が作業現場で試行錯誤を繰り返し、意見を出し合って進める特別な授業であり体験でした。今後もこのような授業が存在し続けることを願っています。